

11-1 交通事故とドライバー・モデル

交通事故がなぜ起きるかという発生モデルには二つの異なる立場が存在します。一つはスキル・モデル、もう一つは認知モデルです（図1）。

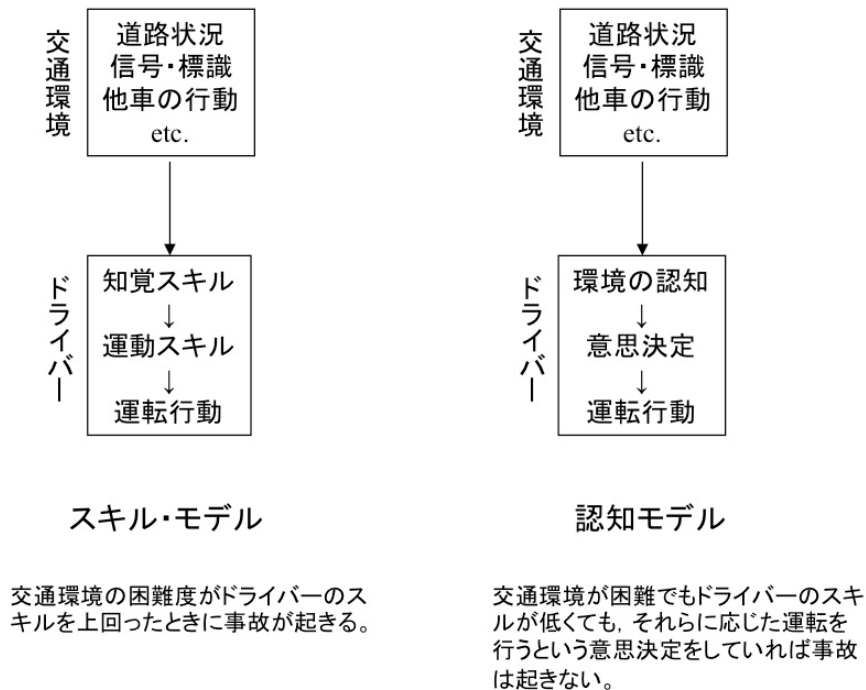


図-1 スキル・モデルと認知モデル

スキル・モデルでは「交通環境の困難度がドライバーのスキルを上回ったときに事故が起きる」と考えます。この考えに立つと、ドライバーのスキルを高めるか、交通環境の困難度（対処の難しさ）を引き下げれば事故を減らすことができるはずですが。

ドライバーのスキルを高める対策としては、運転免許取得前の教育・訓練、取得後の教習などを充実させることが考えられます。もう一つ、スキルの足りないドライバーには運転させないという方策もありえます。運転適性検査などを厳格に行って、適性のない人には免許を与えない、事故を繰り返すドライバーからは免許を取り上げることが交通安全に役立つと考えるのです。

交通環境の困難度を引き下げるには、道路の見通しをよくする、車線の幅を広げる、交差点に信号機をつける、夜間の照明を明るくする、自動車の操縦性能を高めるなどの方策があります。しかし、道路や自動車の安全性を高めても、ドラ

ドライバーがリスクを高める方向に行動を変化させてしまえば意味がありません。

認知モデルでは交通環境の困難度を正しく認知すること、その認知に基づいて行動を決定すること、そしてその行動を意図したとおりに実行することが重要だと考えます。この、認知、判断、実行がうまくできないと事故が起きると考えるのです。たとえ交通環境の困難度が高くても、ドライバーのスキルが低くても、それらに応じた運転をしていれば事故は起きないでしょう。したがって、交通安全対策としては、ドライバーが交通環境を認知する能力の訓練と、自己の運転技能の正しい認識に重きを置きます。たとえば、公園の横を通るときは子どもが飛び出してくるかもしれないことに警戒すること、大型車が左折する後ろに直進する小型車やバイクが隠れている可能性があることなどの危険を予知する能力を高める訓練が有効と考えます。また、高齢者には自分の反応速度や視力が落ちていることを自覚させるテストなどを受けさせて、自己の運転能力の低下を認識させ、低下した実力にみあった運転スタイルを指導するという方策もあります。